

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第41号

2018年2月3日

マタイ受難曲 各論-12 (第44, 45, 46, 47曲)

第44曲 コラール「委ねよ、お前の道、心の煩いを」(4声体単純コラール、4/4拍子、ロ短調/ニ長調)

受難コラール「おお御頭、血と傷にまみれ」の旋律が用いられますが、歌詞は同じ作詞者であるパウル・ゲアハルトによる「おお御頭」とは別のコラールから採られています。命令調の歌詞ですが調性は低く、ソプラノはe(ミ)を超えることなく、穏やかな響きになっています。三行目の「雲や大気や風に」の歌詞には絶えずいずれかのパートに8分音符の動きが現れ、空を流れる雲や風を描写しているかのようです。

第15曲目で始めて現れ、第62曲までに5回歌われるこのコラール旋律は「マタイ受難曲」のイメージに決定的な影響を与えるライトモチーフ(楽曲中において特定の人物や状況などと結びつけられ、繰り返し使われる短い主題や動機)的役割を果たしています。この旋律は一つとして同じ調性で現れることがないため、その意味を巡って諸説が唱えられています。少し長くなりますがここで服部幸三氏の解釈をご紹介します。(ミシェル・コルボ指揮、バッハ「マタイ受難曲」レコード解説書。Erato REL-10~12、1982年)

「このように新旧の要素をまじえながら、しかもそこにひとつの破綻もなく、音楽そのものが、神と人の前で演じられる厳粛な祭典として響くのが、バッハの『マタイ受難曲』である。その秘密については、すでに多数の研究者が多くのことを語ってきた。ここではその中から全体を貫く音楽的設計の巧みさの一例だけを指摘しておこう。曲全体を通じて、いくつか現れるコラールのうち、もっとも印象深いのは、“血汐したたる主のみかしら”の題で知られるコラールである。このコラールは、第一部・第二部を通じて全曲の中に5回姿を見せる。興味ぶかいのは、その旋律がどのような高さで歌われるかという、いわゆる調性の選択の手法である。はじめ(筆者注:第15曲)は嬰ハ短調、次(第17曲)はハ短調、三度目(第44曲)はロ短調というように、コラールはまず、イエスの下降する運命を象徴するかのように半音ずつ緩やかに下降する。ところで、4回目(第54曲)はどうであろうか。それは、無知な群衆が、茨で冠を編んでイエスにかぶせ、つばきをはきかけ、葦の棒をとり上げて頭をたたいた、と福音史家が報じたあとで、原コラールの第1節と第2節が、次のように歌われる箇所である。(歌詞略)ここで、今まで下降し続けたコラールは、逆にニ短調に向かって上昇し、その悲痛な明るさの中に、民衆が嘲りをこめてイエスにかぶせた茨の冠こそが、実はまことの冠であったという真実が明かされる。金銀宝石をちりばめた冠は、いつの世でも虚飾に過ぎなかったではないか……。そして最後に、いよいよ決定的な瞬間が迫ってくる。福音史家が、“イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた”と息をひそめて報じたあと、有名な受難のコラール「血汐したたる主のみかしら」(の第9節、第62曲)は、はじめてそもその高さであるイ短調で、静かに、静かに、聞く人の心にしみわたるのである。はじめは徐々に下降し、やがて悲痛な輝きをおびて上昇し、最後に、安らかに深い思いをこめて原調に復帰する。こうした音楽的設計が、どうして偶然といえようか。あえて言うなら、このような隠された音楽的設計の巧みさを、私たちはこの受難曲の中に、それこそ限りなく発見するであろう。」(太字およびカッコ書きは筆者による)

第45曲 総督ピラトの審問と磔刑判決-2(エヴァンゲリスト、ピラト、ピラトの妻、群衆)

祭のたびに民衆の望む囚人を一人釈放するという習慣に従い、ピラトはもう一人の囚人バラバとイエスのどちらを釈放するか群衆に問いかけます。彼はイエスに罪はなく、妬みによって引き渡されたことを知っていました。そのときピラトの妻から伝言がありました「あの人とは関わらないでください」。無論ピラトも同じ考

えです。しかしイエスを引き渡した聖職者たちは群衆を扇動し、バラバを釈放してイエスを処刑するよう求めさせます。再びピラトが二人のうちどちらを釈放してほしいかと聞くと、群衆は一斉に「バラバを！」Barrabam!」と答えます。この部分の合唱はレ#、ファ#、ラ、ドという減7の和音(Dm.dim7th)で歌われ、レ#とラの減五度という不協和音程によって衝撃的な効果をもたらします。ピラトが再び「ではキリストと言われるイエスはどうしたらよいか」と聞けば、群衆は口々に「十字架につけろ！」Lass ihn kreuzigen!」と叫びます。

第41曲 b「知ったことか、お前の問題だ」とこの合唱(第45曲 b)、そして半音高く移調して歌われる第50曲 bの「十字架につけろ！」は通奏低音、弦楽器とオーボエが合唱の各パートをユニゾンで補強しますが、フルートだけは第Ⅰ、第Ⅱアンサンブルの各2本、合計4本がまとまってオブリガート(助奏)的な独自の旋律を奏でます。独立したフルートのパートにはバッハの強いアピールを感じますので、聴衆にも合唱団にもフルートの音が聞こえることが望ましいです。しかしいくつかのCDを聞いた所では、41bはともかく、45bと50bで合唱の4声が出そろってから、フルートを聞き分けるのが難しいというのが実情です。しかし聴き取れないからと言ってフルートを省略してしまえば、印象は全く変わってしまうでしょう。

第46曲 コラール「なんと驚くべき刑罰だろう！」(4声単純コラール、4/4拍子、ロ短調)

ヨハン・ヘールマン作詞の受難コラール「心から愛するイエス」第4節が歌われます。このコラールが現れるのは第3曲、第19曲に続いて3回目です。第3曲では、直前にイエスが語る「人の子は十字架につけられる」という言葉に対して「(一体)あなたは何を犯したのですか？」と、厳しい判決を予告されながらもなお信じがたい思いの信徒の心を歌います。しかしこの第46曲ではもはやイエスの死は免れがたい状況です。2曲のコラールは調性も和声もよく似てはいますが(7小節からのバスの動きはほとんど同じ)が、後者ではテノールの音型に特徴があり、第3曲よりも高い(歌い手としては苦しい)音程で驚きと絶望を表現しています。

第47曲 総督ピラトの審問と磔刑判決-3(エヴァンゲリスト、ピラト)

全曲で最も短い2小節のレチタティーヴォで、途方に暮れたピラトは「一体彼はどんな悪事を働いたのか」とつぶやきます(つぶやくように聞こえます)。その後で再び群衆が「十字架につけろ！」と叫ぶのですから、実際この言葉は大きな声で発せられたはずですが、バッハの音楽は自問自答のような趣です。

第48曲 レチタティーヴォ「あの方は、私たちすべてに善いことをしてくださった」(ソプラノ、オーボエ・ダ・カッチャ1、2、通奏低音、4/4拍子、ホ短調/ハ長調)

3度の音程を保ちつつ、波打つように進む2本のオーボエ・ダ・カッチャに乗って、ア・バトゥータ(a battuta: 拍子を正確に)でソプラノが歌うレチタティーヴォですが、アリオーソにも聞こえます。歌詞はピラトの問いに答えて、反証としてイエスの善き行いを列挙します。曰く「見えない人には視力を与え、歩けない人は歩けるように。御父の言葉を私たちに伝え、罪人を受け入れられた。云々」。そして最後に「それ以外は何一つ、私のイエスはなさらなかった」と、彼の潔白を証明します。

オーボエ・ダ・カッチャの3度平行は人に寄り添うイエスの愛の寓意という解釈もありますが、それでは狩りの(ダ・カッチャ: da caccia)オーボエをオブリガート楽器に選んだ理由が説明できません。なぜならオーボエ属には文字通り Oboe d'amore (愛のオーボエ)というそのものズバリの名称を持つ楽器があり、第12曲、第13曲のソプラノソロにはこの楽器を2本ずつ協演させているのですから。

通奏低音は全音符と8分音符を交互に使う独特な動きを見せます。

【後記】「マタイ受難曲各論」も尻に火がつきかけていますので、発行を密にすべく力を入れています。受難の物語はいよいよ山場にさしかかってきました。考察は尽きませんが「下手な考え、休むに似たり」にならぬよう、事実関係に即した記述に徹したいと思っています。お気づきの点はご遠慮なくご指摘ください。(新井治男)

